

【寄稿特集】陳伯陶先生受章記念寄稿論文  
一位台灣人青年在日佔時期新加坡—閱讀佐佐木讓，《昭南島  
有蘭花嗎？》

富田哲

淡江大學日本語文學系副教授

摘要

佐佐木讓，《昭南島有蘭花嗎？》這部小說是以日本發動馬來亞戰役及珍珠港事件的1941年末到日本戰敗的1945年8月的新加坡為舞台的作品。主角梁光前是在台灣出生的客家人，住在日佔時期被易名為「昭南島」的新加坡，在當地的日本人經營的貿易商工作。前往新加坡前，他的身體早已刻印著極濃厚的越境性，但因居住在英國統治、日本軍政下的新加坡，歷經加入以華僑組成的抗日義勇軍、參與馬來亞共產黨秘密策畫的東條英機謀殺，他的身體更加展現其豐富多彩的越境性。儘管如此，成長於殖民地台灣的客家家庭、在日本帝國首都之東京的商業學校念書、在新加坡工作這個主角梁光前的設定，於當時的時代背景，應該並不算是特別特殊的。本論文特別關注以下四個方面：有數種唸法的光前的名字、「中國人」的族群多層性、基於客家意識的光前的行為以及光前的帝國臣身分不一定代表「日本人」的此種矛盾，依此釐清以日本帝國末期的「昭南島」為背景如何描述光前的身體。

關鍵詞：新加坡 客家人 越境性 多層性 帝國臣民

**A Taiwanese Youth in Japanese Occupied Singapore:  
*Shonanto ni Ran Ariya (An Orchid in Singapore)* by Sasaki  
Joh**

Tomita Akira

Associate Professor, Tamkang University, Taiwan

**Abstract**

*An Orchid in Singapore*, authored by Sasaki Joh, depicts Singapore from the end of 1941 when Japan commenced Malayan Campaign and attacked Pearl Harbor, to August, 1945 when Japan surrendered to the Allies. Liang Guangqian, the main character of this novel, is a Hakka from Taiwan, and works for a Japanese merchant who lives in Singapore or Shonanto as it was called under the Japanese occupation. His body was characterized by his transborderness even before coming to the island, and the body has been maximized in the British-ruled and Japanese occupied Singapore, and also through the experience of joining the anti-Japanese volunteer army consisting of oversea Chinese and having a hand in the assassination plot against then Japanese prime minister Tojo Hideki, secretly planned by the members of the Malayan Communist Party. It cannot be said, however, that his character; grown up in a Hakka family in Taiwan, studied at a commercial school in the capital of Japanese empire and works in Singapore, is unnaturally exaggerated in the context of the period. This paper would like to focus on the following four aspects; Guangqian's name with several readings, multi-layered ethnicity of 'Chinese,' Guangqian's behavior based on his Hakka identity, Guangqian as a subject of the empire but not necessarily as a "Japanese." By doing so, it is expected to understand how Guangqian's transborder body is drawn in "Shonanto" against the backdrop of the closing years of Japanese empire.

Kewwords: Singapore, Hakka, Transborder, Multi-layer,  
Subject of Japanese Empire

# 日本軍政下シンガポールのある台湾人青年—佐々木譲『昭南島に蘭ありや』を読んで

富田哲

淡江大学日本語文学科副教授

## 要旨

佐々木譲『昭南島に蘭ありや』は、日本がマレー作戦、真珠湾攻撃を発動した 1941 年末から 1945 年 8 月の敗戦までのシンガポールを舞台とした作品である。主人公の梁光前は台湾出身の客家人で、日本軍政下で「昭南島」と呼ばれたシンガポールに在住する日本人貿易商のもとで働いている。もともと濃厚な越境性に刻印されていた光前の身体は、英国統治から日本軍政下のシンガポールという空間で、また華僑によって構成される抗日義勇軍への参加や、マラヤ共産党のメンバーが秘密裏に進める東条英機暗殺計画への関与をとおして、さらに多彩な輝きを放っている。とは言っても、植民地台湾で客家の家庭に育ち、帝都東京で商業学校に通い、シンガポールで仕事をしているという光前の人物設定が、当時の文脈において特異なものだというわけでもないだろう。本稿ではとくに、複数の読み方を持つ光前の名前、「中国人」のエスニシティの多層性、客家意識にもとづいた光前のふるまい、帝国臣民でありながら必ずしも「日本人」ではない光前に注目し、光前の身体が日本帝国末期の「昭南島」を背景としていかに描写されているのかをうかびあがらせたい。

キーワード：シンガポール 客家人 越境性 多層性 帝国臣民

# ある台湾人青年にとっての日本軍政下シンガポール— 佐々木譲『昭南島に蘭ありや』を読んで

富田哲

淡江大学日本語文学科副教授

## 1. はじめに

陳伯陶先生が古稀をむかえ、名誉教授となられたのは2001年8月のことであった。ご退職を記念して刊行された『陳伯陶教授栄退紀念 隨筆・文集』（2001年、大新書局）には、「着任してまだ1年にもならない私」も駄文を書かせていただいている。ページの端が若干黄ばみはじめたこの本をひさしぶりにくってみると、歴史研究者としては、いずれこの本も史料として後世の人々の用に供されることがあるのかもしれない、などという想像をめぐらしてしまう。いや、すでに歴史を語り始めているのかもしれない。

寄稿の一つに、当時、交流協会の日本語専門家で、淡江でも教えておられた谷口龍子先生（現在は東京外国語大学）の「明治男の沈黙」と題する文章がある。もちろん、陳先生が「明治男」であるはずはなく、あくまでもイメージとしてのそれである。この一文は「日本統治時代に日本語教育を受けた陳先生の世代が現役を退かれることにより、台湾における日本語教育はひとつの時代を終えたことになります」とむすばれている。このころは「日本統治時代に日本語教育を受けた」世代がぎりぎり「現役」でいらっしゃったんだ、とあらためて思い返しつつ、実際のところ、陳先生は今でも現役で学生の教育にあたっておられるわけだが、少なくとも第一線を退いたという意味では、たしかにこのころが一つの時代の終わりであった。

そういえば、このご退職の年の初め、歴史学者の戴国煒氏が亡くなった。日文系の尾牙でのあいさつで陳先生が、「私と同年の戴国煒氏が…」と話題にされていたのを思い出す。いま調べてみたところ、陳先生は1931年2月生まれ、戴氏は同年4月生まれである。

この記念号に稿を寄せるにあたり、かねてより気になっていたあ

る小説について書きたくなった。佐々木譲『昭南島に蘭ありや』(以下『蘭』と称する)である。主人公の梁光前という台湾生まれの男性は、陳先生や戴氏より 12 歳上であり、また戴氏と同じ客家人である。

なお同書は、1995 年 8 月の中央公論社刊が初出であるが、本稿執筆にあたって使用したのは 2001 年初版、2008 年改版の中公文庫のもので、上下の 2 巻になっている

## 2. 半世紀後の「昭南島」

『蘭』は、「物書き」である「わたし」のシンガポール取材中の語りで始まる。「わたし」は、第二次大戦期を主題とした数々の作品を発表している佐々木自身だろうか。日本の軍政下で昭南島と呼ばれた時期のシンガポール、より具体的に言えば、シンガポールで「日本軍がおこなった、インド国民軍との連携工作」(上 14 頁。以下、上下の別とページ数のみしるす)について調べるべく、「わたし」はこの島のあちこちを歩き回っている。郊外のブキィティマでスコールに降られ、濡れ鼠になって歩いていたところ、通りかかった高級車から一人の老人が降りてくる。

「日本人ですか」と、その老人は日本語で訊いてきた。

「ええ」わたしは答えた。「旅行者です」

「街までなら、お乗りなさい。この雨の中を歩くのはたいへんだ」

そこまで聞いてから、わたしは老人の日本語に少し訛りがあることに気づいた。老人は、日本人ではないようだ。(上 10)

見かけから「日本人」であると判断された「わたし」は、「日本人ではな」さそうな老人から日本語で声をかけられる。「日本人ではない」という推測は「少し訛りがある」老人の日本語を根拠としているが、だからといってその日本語が後続のやりとりの障害になることはない。運転手とは「中国語らしい言葉」で話しているが、それが「どこの方言なのかは、わたしには区別するだけの力はない」(上 10)。その後、この老人がかつてシンガポールに住み、戦後すぐ、シ



シンガポール生まれの妻とともに台湾に戻ったこと、先日妻を亡くし、彼女との思い出の場所をめぐるべく、約半世紀ぶりにシンガポールを訪れたことがあきらかになる。戦争中のことを調べているという「わたし」の「戦争のことには、お詳しいですか？」の問いに対して、老人は「たぶん、あんたよりも詳しい。あんたは戦後の生まれでしょう？わたしは大正八年の生まれですよ」（上 14）と返す。そしてこの後、「わたし」は老人から、1943 年 7 月に起こったという東条英機暗殺未遂（もちろん、これ自体はフィクション）の顛末を聞かされることになる。どうやらこの老人は半世紀後の梁光前らしい。

### 3. 梁光前という名前

『蘭』は前節で紹介したプロローグに続き、太平洋戦争開戦前夜から日本軍のマレー作戦までの第一部、シンガポールの戦いの第二部、時が飛んで 1943 年 6 月から東条英機暗殺未遂までの第三部、そして日本の降伏直後の第四部に分かれている。シンガポールが舞台であり、陰に陽に同地の民族的、言語的多様性が作品中に書きこまれている。台湾出身の客家人である梁光前は、15 歳のときから 3 年間で、帝都東京の旧制の商業学校で勉強した。卒業後いったん台湾へ戻ったものの、東京で同じ下宿に住み商業学校の同窓でもあった桜井幹夫の誘いに応じ、シンガポールで貿易業をいとなむ幹夫の父のもとで 1941 年 5 月から働くことになった。ただ、光前の身体は、シンガポールにやってくる以前にすでに濃厚な越境性に刻印されていたと言うべきである。幹夫は今後の事業の拡大のため、「日本語と福建語を流暢に話すことができる」（上 100）光前の助けが必要だと考え、父親に光前を推薦している。なお、ここで言う福建語は後述する閩南語＝台湾語と同義であろう。

シンガポールにやってきた光前を港でむかえた幹夫は、前日、英国が日本へのゴムの禁輸を決定したことを伝え、今後の商売の状況はあまり楽観できないと告げるが、光前は「商売を縮小するときは、遠慮なく言ってください。わたしは、どこにいたって生きてゆけま

すから」(上 101)と答えている。

もともと光前の身体が多層性は、「日本語と福建語を流暢に話すことができる」といった程度の単純なものではない。おそらく光前は、幹夫の理解を超えるような空間を生きる術を身につけている。

たとえば、自分の名前をめぐるふるまいを見てみよう。日本軍のマレー作戦の開始と真珠湾攻撃を受けて、1941年12月8日朝、英軍が在シンガポール日本人の拘束に走る。幹夫の父、桜井庄二郎宅にも、英軍マラヤ司令部のトンプソン中尉らがかけつける。前の晩、庄二郎宅に泊まった光前もこの場にいわせることになった。

「名前は」とトンプソン。

光前は、自分の姓を閩南語の読みかたで答えた。

「<sup>ニユン</sup>梁」

光前が自分から名乗るときは、客家語でリオンと発音する。旅券にも、客家語の発音をローマ字で記した。しかし台湾では、閩南語に近い読みかたで呼ばれることも多かった。どちらも自分の名なのだ。

トンプソンが確認した。

「ニユン。それがファミリー・ネームなのだな」

「ええ」

トンプソンは書類に視線を落とした。その書類には、光前の名があるとしても、旅券と同様のリオンという名で載っているはずだ。ニユン、ではない。

トンプソンは不可解そうに顔をあげると、訊いた。

「シンガポール生まれか？」(上 46-47)

また、マレー半島での日本軍の進撃が続き、シンガポールでもいよいよ緊張が高まっていた1942年1月6日、シンガポール駅前の広場で、光前は見覚えのある男に声をかけられる。マラヤ共産党のナンバー・スリーで、このとき華僑による抗日義勇軍を組織すべく奔走していた鄭傳順である。傳順は義勇軍への参加を熱心に勧誘する。

光前は、少しためらってから、自分の姓だけを客家<sup>ハツカ</sup>の発音で名乗った。

「ぼくは梁<sup>リオン</sup>だ。もし気が変わったら」

「客家だね」

「だからといって、軍人好きの家系というわけじゃないんだ」

(上 223)

「ニュン」も「リオン」も、そして彼が日本語で名乗るとき発したであろう「リョウ」も、いずれもが「自分の名」である。客家人であっても、客家の姓である「リオン」のみが排他的に「自分の名」となるわけではない。国境を越えて移動するみずからの国民に対して国家が発行する旅券の記載が唯一の「自分の名」を規定するわけでもない。そもそも光前は、おそらくシンガポールへ来る前に取得した日本政府発行の旅券に、客家語の発音を自分の意思で「記した」のであり、旅券＝日本政府が彼に名前を与えているのではない。

#### 4. 「中国人」の多層性

幹夫は物心がついて以来、商業学校で学んだ5年間をのぞけば、シンガポール在住である。「この街の貌の多様さが、陰影が、極端さが好きだった。思春期の五年間を暮した祖国の首都よりもずっと」ということばに偽りはないだろう。しかしそれは、あくまでも「この熱帯の植民地都市」(上 355-356)に住む日本人としての感慨であり、光前とそれを共有することはおそらく不可能である。もちろん、二人は同じ「大日本帝国臣民」であり、同じ旅券を所有しているが、光前は幹夫と同じ「日本人」ではない。それは光前が植民地人だからということもあるが、それとともに、このシンガポール社会において、台湾出身客家人の光前の民族的、言語的多層性が、本国人の幹夫などとは比較にならないほどに増幅されていることを指摘しておく必要がある。上記のトンプソンと光前の会話に先立って、トンプソン、幹夫、光前のあいだで次のようなことばがかわされる。



トンプソン中尉は、庄二郎の言葉には取り合わなかった。書類に目を落としてから、ふしぎそうに光前に顔を向けてきた。

「男がひとり多いようだが、きみは、この家の者か？」

瞬時、言葉を失っていると、幹夫がかわりに答えた。

「うちの使用人です」

「日本人かな」

「中国人です。彼も拘束なのですか」

「中国人については、命令は受けていない」トンプソンが、光前に訊いた。「中国人というのは、ほんとうかね」

答えにくい質問だ。自分は国籍を問われたのか。それとも、血か。出自か。日本の植民地・台湾で生まれた漢族、客家人は、この場合、どう答えるのが正しいのだ？

光前は一呼吸のあとに閩南語で答えた。

「そのとおりです。わたしは、中国人だ」それから、英語に変えて言った。「このひとの言うとおりです。わたしは中国人です」

閩南語は、福建南部で話される言葉の方言で、台湾の漢族がふつうに話す言葉である。台湾語とも呼ばれる。客家の光前にとっては、もうひとつの母語であった。不自由はない。(上 45-46)

光前がトンプソンに対して「わたしは中国人です」と答えたのは、もちろん第一義的には拘束を避けるためである。幹夫の答えも同様である。しかし、光前は「答えにくい質問だ」とは感じているが、「中国人」であることを否定してはいない。実際この後、「英軍か市警察の関係者」(上 81)にあやうく拘束されそうになったとき(トンプソンの尋問の際、光前は自分は香港生まれだといつわって難を逃れている)、機転をきかせて助けてくれた娼婦の麗娜(おそらく、『蘭』のプロローグで老人が言及している死んだ妻)と初めてことばをかわすのだが、台湾の出身なら日本人ではなく中国人だろうと聞く麗娜に対し、光前は「そうだけれども、台湾は日本の植民地だ。ぼくは日本の旅券を持ってる」(上 83)と答える。翌日、「わたしたち、

airiti

どうなる？戦争が激しくなって、やっていける？」と問う麗娜には「ぼくたち中国人ってこと？」(上 95-96)と聞き返し、さらに二日後、麗娜が「やはり日本人でいたいのか？中国人として生きるのはきらい？」と詰め寄ると、「ぼくは中国人だって」(上 111-112)と強調している。抗日義勇軍に入って日本軍との激戦を生きながらえるが、シンガポール陥落直後にも麗娜に「これからは、中国人なら安全だ、とは言えなくなるかもしれない」(下 26)とつぶやいている。

もっとも、陥落前も陥落後も、シンガポールに暮らす光前の日常は、それこそ旅券と結びついて規定されるような「中国人」という近代的なアイデンティティからは遠いところにあったように思える。近代制度のもとでは「中国人」に包含されてしまうであろうさまざまな「貌」が『蘭』には頻繁に登場し、光前もそういった現実に対して、実にしなやかに(とは言っても、本人にとってはごく当たり前の作法として)ふるまっている。いくつか例をあげてみよう。

まず、桜井一家がトンプソンらに連行された後、屋敷にさっそく物盗りがやってくる場面である。拘束を逃れてまだ屋敷内に残っていた光前は、かれらと顔を合わせることになる。

階段の下に現れたのは、粗末なみなりの、若い中国人だ。右の二の腕に、刺青がのぞいている。刺青の男の背後に、男がさらにふたり、姿を見せた。見るからにやくざな印象のある男たちだ。

最初の男が、気をとりなおしたかのように言った。

「先客がいたのか」

カントン  
広東語だった。

光前も、広東語で言った。

「客じゃない。この家の者だ。お前たちは？」

訊いてから、無意味な問いだと気づいた。問うまでもなく、退去を命じるべきだったかもしれない。

相手は、光前の質問には答えなかった。

「日本人なのか」

「ちがう」(上 59-60)

盗人たちを追い払った後、光前は自分の部屋へ戻ろうとするが(その後、上述のとおり、麗娜に助けられることになる)、ここで居住地区の様子が説明される。

光前の住むマライ・ストリートは、小坡の中の客家人の固まってすむ一角にある。ビクトリア・ストリートとノースブリッジ・ロードにはさまれたごく狭いエリアだ。一九二〇年にシンガポールで廃娼が実施されるまでは、日本人娼婦たちの花街としてアジアじゅうに知られていた地区である。シンガポール華僑の中でも、客家人は少数派だから、広東人や福建人ほどには、早くから広い居住区を作ってきたわけではなかった。シンガポールに同族が固まって住む隙間を探すとなれば、このような地区しか空いてはいなかったのだ。(上 78)

アパートはすでに英軍、警察の搜索を受け(このとき、光前の日本の旅券も押収されている)、光前は身を隠す場所をさがさなければならなくなる。「海南人の経営するコーヒーショップ」(上 84)で麗娜と今後の住居や仕事について話す。

「でも、会社もなくなったんでしょう？」

「うん。仕事を見つけて、食いつながなければならないな。まず最初に、部屋を借りることだ」

「客家人の地区を出てもいいの？」

「福建人の多いところなら、そんなに言葉に不自由はないよ」  
福建人は、シンガポールの中国人の中でも最大の多数派だ。「ロコール・ロードの北側に行けば安全だろう」(上 86)

鄭傳順と光前は 1941 年 12 月 11 日に初めて会い、1942 年 1 月 6 日に再会している。いずれのときも、傳順の抗日運動への誘いに光前は首を縦に振らないのだが、それぞれの描写を対比してみると興味深いことに気づく。

<12 月 11 日>

男(傳順のこと)は愛想よく訊いてきた。

「最近移ってきたひとだね」

福建語だった。

「ええ。四、五日前に」光前も福建語で合わせて答えた。

「毎日、新聞をよく読んでいるようだが」

「世の中のことが気になりますから」(上 107。丸がっこ内は富田)

<1月6日>

「ねえ、きみ」と、誰かが肩をたたいた。

(中略)

男は広東語で言った。

「前にも、会ったことがあるね」

深い知性を感じさせる声だった。手配師とはちがう。男の表情には、打算や狡猾さも、過度の馴れ馴れしさも見当たらなかった。

光前は閩南語で答えた。

「そうだね。顔だけは覚えてる」(上 221)

数日来、熱心に新聞を読んでいるのを見て、傳順は光前に「多少は同胞の悲惨に心痛めている」(上 110)男だと見こんで声をかけたのだが、その言語は福建語だった。当時、シンガポール華人の多数が話していたであろう福建語で初対面の華人に声をかけるという行為は、相手が少なくとも自分の言っていることを理解できるだろうという期待が前提となっていると思われる。もちろん、光前は傳順の言ったことを理解し、さらに同じ福建語で応答している。ただここで光前は、傳順の福建語に「合わせて」いるのであり、福建語以外の選択肢が他にも存在することが示唆されている。ただ、光前の福建語がいかなる印象を与えたのか、たとえば音声的特徴からの出身地の推測はここには示されていない<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> 「小坡の福建人地区」で麗娜とともに部屋探しをした際の大家との会話には次

一方、1月6日には、傳順はすでに見知っている光前に広東語で語りかけている。鄭傳順には「チェン・チュンション」とふられているが、広東語の発音のようである。また、1941年12月8日朝、日本軍のマレー作戦開始を受け、シンガポール警察副総監、英軍情報部部長のジョン・ダリー大佐は、政治犯として2年間チャンギ監獄に収監中の鄭に、監獄を出て抗日義勇軍を結成し、英軍とともに日本軍と戦うよう要請するが、傳順はダリーに「よい鉄は釘にしない。立派な男は、兵隊にならない」(上70)という中国のことわざを広東語で語っている(もちろんダリーはそれを聞いてもわからない)。

傳順が光前への語りかけの言語として広東語を選択した理由はさだかではない。しかしここでは、光前が傳順に広東語では返さず、閩南語で答えていることに注目したい。上述の屋敷に侵入した盗人との会話を見れば分かるとおり、光前は広東語もできる。しかし、12月の会話のように傳順に「合わせ」ることはせず、あえて閩南語を使っているのである。

すでに述べたように、いずれにおいても傳順の勧誘は成功していない。しかし12月には、いらだった傳順が「たたくようにテーブルに両手をつき、勢いよく立ち上がって去っていた」(上110)のに対して、1月には「でも、気が変わったら、加わってくれ。ブキティマ・ロードの南洋中学校が(抗日義勇軍の)兵営になってる。わたしは、<sup>チェン</sup>鄭<sup>チュンション</sup>だ。鄭傳順。わたしを訪ねてくるといい」(上222。丸がっこ内は富田)と語りかけている。そして実際、この2週間後に光前は抗日義勇軍に入隊するのである。両者の決裂が福建語という同一の

---

のようにある。

初老の大家は、話がまとまってから、光前に訊いてきた。

「あんたは、台湾のひとかい？」

「あ、いや」やはり訛りに気づかれたか。光前はここでも嘘をついた。「香港ですよ」

「ふん、そうかい」

大家は、納得した様子でもなかったが、それ以上は追及してこなかった。  
(上89)



言語でのやりとりのなかで引き起こされているのに対して、光前の義勇軍加入の予感がことなる言語でのやりとりによってかもしだされている。これを単一言語の共有が理想的なコミュニケーション、ひいてはそれが同一の民族的アイデンティティへの帰属を保障するという幻想に対する懐疑とみるのは思いこみが過ぎるだろうか。

さらにつけくわえれば、1月の会話で光前が話したのは閩南語であり福建語ではない。『蘭』において閩南語(=台湾語)と福建語は同義で使われており、光前が傳順への返答にことなる言語を使ったというわけではない。ただ『蘭』では、どうやら多くのシンガポール華人によって使用されている福建語と、台湾出身の客家人である光前の言語としての閩南語という言語名称の使い分けがなされているようである<sup>2</sup>。もしそうだとすれば、広東語を話す傳順と閩南語を話す光前という構図は、言語と民族的アイデンティティを一対一で結びつけることなど、本来的には不可能な華人社会の様相を鮮明にうかびあがらせていると言えるのではないか。

## 5. 客家としての光前

『蘭』の(上)のカバーには次のような紹介が付されている。

昭和十六年、シンガポールに在住する日本人に引き上げ命令が下りた。台湾生まれの客家の青年・梁光前は、その日から己の存在を問い続けることになる。中華の民か、大日本帝国の臣民

---

<sup>2</sup> たとえば、麗娜が、チャンギ監獄に収監されている桜井庄二郎と幹夫に光前からのメッセージを伝えるべく、知り合いの囚人王との面会におとずれた場面には、「麗娜は、脇に立っている看守たちを見た。ふたりともシーク教徒だ。このまま福建語で話しても、中身は理解されまい」(上 230)という語りや、「(前略)サクライって日本人たちは、中国語は話せるのか」「福建語なら、聞いてわかるはずよ」(上 233)という王と麗娜のやりとりがある。また、1943年6月23日、東条英機暗殺の準備のため、マレー半島からシンガポールに秘密で火薬を持ちこもうとする「漁夫のような身なりの中年の男」は、シンガポールに入る直前の列車内での検問で、「どこから？シンガポールで何をする？」と質問する日本兵に対して、「いまジョホール・バルで乗った。近くに住んでる。商売。商売」と「福建語」で答えている(下 108-109)。

か。どちらでもあり、どちらにもなれない己とは何か？ふとしたことから中華義勇軍に入ることとなった光前は……。

たしかに戦火のなかを、そして日本の軍政下を、己が何者なのかを問いつつ、しかし時代の荒波をかいくぐっていく光前の姿の描写が、『蘭』の醍醐味である。ただ、「どちらにもなれない己」が「台湾生まれの客家の青年」であることは疑いようがない。麗娜と初めてことばを交わした際も、わざわざ光前は「近所の評判どおり、なまめかしく美しい娘だ。少なくとも、客家人の基準では美人と言える容姿の娘だった」（上 84）と語っている。実際、光前の行動にはしばしば客家の身体が濃厚にうかびあがる。台湾あるいはアジア各地で流布している客家人言説も意識しながら読んでみるとおもしろい。

マレー作戦開始後、しかしシンガポールでの戦端が開かれる前の落ち着いたクリスマス直前のある日、光前は麗娜をともなつて中古品市場をおとずれる。光前がひそかに思いを寄せる桜井庄二郎の娘、摩耶は、父や兄とは別に兵営病院に収容され暇をもてあまし、面会に来た光前に蓄音機とレコードを差し入れるように依頼したのである。あにはからんや、そこで桜井家から盗み出された蓄音機とレコード一式が売られているのを発見する。しかし所持金ではとても手が出ない。そこで近くの遊園地、ニューワールド（新世界遊芸場）の賭博場で金を増やそうともくろむ。この時点で、麗娜は光前が客家であることをまだ知らないようである。

彼女は遊園地に入ると、いっそうぴったりと身体を光前に押しつけてきていた。「食事のあとはどうするの？お芝居？」

「ぼくは、賭博場に行ってみたい。つきあってくれるかい」

「<sup>ぼくち</sup>博打が好きなの？ひとは見かけによらないのね」

「とくべつ好きじゃないけど、まったくしないわけでもないんだ」

（中略）

「晩御飯は、きみがごちそうしてくれるんじゃないかっけ」

「賭けに夢中になったら、わたしの持ち金まで貸してくれって言いたしかねないわ」

「なるほど」自分には、あんがいその傾向があるかもしれない。

博打好きは、客家人の血の特徴なのだ。「そのとおりだ。先に食事して、残りの金で、賭博場に乗りこもう」（上 166-167）

麗娜に知らせないまま抗日義勇軍にくわわった 10 日あまり後、光前はわずかな外出時間を得て、麗娜のもとに姿を見せる。義勇軍を離脱して自分のもとに戻ってくるよう懇願する麗娜に対して、光前は言う。

「ぼくは警察に追われてる。ただでさえ顔をおおっぴらにはできない男だというのに、もしきょう帰営しなければ、ぼくは義勇軍の華僑同胞三千人にも、合わせる顔がなくなる」

「<sup>メンツ</sup>面子がそんなに大事？ やっぱり<sup>ヘツカ</sup>客家らしいひとなのね」（上 315-316）

シンガポールの戦いも大勢が決し、義勇軍から脱走しようという考えが光前の頭をよぎったときにも、似たような独白がある。

生きているうちに、義勇軍を脱走するか。

一瞬だが、そう考えた。自分はもう、傳順に対する義理は果たしたのではないか。

だめだ、とすぐ打ち消す。そんな信義に欠ける真似はできない。光前、お前は<sup>ヘツカ</sup>客家の男児なのだからな。客家の男子が、何をもっとも尊ぶかを思い起こせ。お前がどう育てられ、教育されてきたかを思い出せ。（上 359-360）

東条英機のシンガポール訪問をひかえて、日本人会の歓迎準備、および暗殺計画が同時進行していた 1943 年 6 月末、桜井一家の商売仲間で、光前にとってもともにバーでグラスをかたむける仲だったアルゼンチン人リカルド・アルマンド・コルシオ・フェンテスが、憲兵隊に連行されてスパイ容疑をかけられ、取り調べ中に「急に心

臓発作を起こし」で死んでしまう。もちろん拷問によって殺されたことは想像にかたくない<sup>3</sup>。一方、東京からシンガポールに入ったチャンドラ・ボースを、インド人たちが熱狂してむかえる。抗日義勇軍に参加していたことを隠し、日本軍政下でも桜井庄二郎の会社で働いていた光前は、日本人会会長でもある桜井の指示のもと、歓迎会の準備にあたっていた。しかし光前は、歓迎会の会場での東条の暗殺を計画する傳順とも接触を持ち続け、歓迎会にかんする情報を流している。当初、暗殺の実行者となるはずだった傳順らの「同志」の蔡(シンガポールの戦いの最中、光前は彼の命を救っている)が、山中に隠しておいた銃と弾薬の運搬中に日本軍に見つかって殺害され、光前はみずからが実行者に志願すべきかいなか迷い続ける。『蘭』のクライマックスである暗殺未遂事件へ向けて緊張感が高まっていくなか、光前はかつて麗娜と来たことのある観音菩薩堂をおとずれ<sup>4</sup>、おみくじをひく。そこには「生不認魂 死不認屍」とあった<sup>5</sup>。

老人は日傘の下に小さな椅子を置いて腰掛け、古びた漢籍を一冊と虫眼鏡を足もとに置いていた。

「読んでくれませんか」と、光前は紙をわたした。

---

<sup>3</sup> フェンテスは、妻がマレー人だったため英領下では白人社会から疎外されていた。日本軍政下では中立国人として商売を続けることができたが、「せっかくアジア解放の功労者として尊敬も得られようというときに、わざわざアジアじゅうを敵にまわすことをやっている」(下 72)、「この街からお上品な偽善は消えたが、むきだしの欲望が取ってかわっただけだ」(下 75)などと、日本の戦争やシンガポール統治にはきわめて批判的である。光前はおそらくみずからの境遇と重ねあわせながら憲兵隊の連行されたフェンテスを思いやり、「いったい世界は彼に、(中略)彼にいったいどこに立っていると言うのだろう。どこがフェンテスの居場所だと言うのだろう。この地上のどこが」と嘆いている(下 162)。

<sup>4</sup> 光前はシンガポールの戦いが終わった直後、麗娜のもとを去って以来、彼女には会っていないが、この前日、「娼窟街」で偶然、麗娜を見かけている。翌日再度そこをおとずれるが、麗娜は身を隠し、再会を果たせない。

<sup>5</sup> 後述の代読の老人の解釈では、「ひとは死に怯える。死を恐れる。しかしほんとうは、死は恐れるに値しないものだ。生きているかぎり、ひとが魂の存在を知ることができないように、死ねばもう、そのひとは屍を、死の形を、死のありようを知ることとはできないのだ。ひとは、その程度の卑小な存在でしかない」(下 204-205)という意味。

老人は紙に目を落としたが、すぐに光前を見上げてきた。眼光が鋭くなっていた。光前の目に何か探ろうかという目の色と見えた。

「お若い方」と老人は、深い思惟を感じさせる声で言った。「どこの出身だね？」

光前は、少しためらった後、出自を答えた。

「客家<sup>ハツカ</sup>です」

「そうだろうな。何を願ったのかは知らんが、こんなご託宣を引き出してありがたがるのは、客家人でなければ、そうとうの変わり者だ」(下 204-205)

代読の老人が出自を問うのに対して、光前はややためらいながらも客家であると答えている。暗殺の実行者を引き受けることを決意したのは他ならぬ客家人としての梁光前だった。実は、老人の解釈とはことなり、光前はこの託宣を、人は生前は魂のありか、死後は屍のありかを知ることのできない程度の存在でしかない、という意味に解釈したのだが、いずれもが、死を恐れず愚直に困難に立ち向かうという、客家人の伝統的イメージにそった理解になっている。

## 6. 帝国臣民ではあっても「日本人」ではない

客家人であり、福建語(閩南語＝台湾語)、広東語、日本語、英語をあやつる光前だが、日本敗戦までは台湾出身の日本帝国臣民であった。東京で中等教育を受け、日本人貿易商の信頼を得て仕事をしている光前本人からすれば、台湾出身客家人の自分も日本本国人と同じ「日本人」であってしかるべきである。もちろんその思いはしばしば裏切られ、また光前もそうした現実を冷静に甘受しているように見える。ただ、シンガポールの戦いが終わり、日本軍が在住華僑を対象としておこなった「検証」の場面では、本国人とは決して同等ではありえない植民地出身の帝国臣民の不安定さが鮮烈にえがきだされている。そして皮肉なことに、そこでは憲兵隊のなかの台



湾人さえも、自分の「同胞」ではありえない。

「検証」の布告が出された二日後の 1942 年 2 月 21 日、光前の部屋に日本兵が乱入し、光前に銃剣をつきつける。

「出ろ。表に出ろ。早くしろ」

光前は愛想笑いを見せて、日本語で言った。

「ぼくは台湾人です。ぼくもですか」

兵隊は一瞬、呆気にとられたようだった。しかし、すぐにもう一度目をつり上げて言った。

「出ろ。そういうことは、検証のときに言え」

(中略)

とりつく島もなかった。光前は銃剣を背中に突きつけられて部屋を出るしかなかった。麗娜が不安そうに見つめてくる。

心配ない、と光前はうなずいて見せた。

旅券をすでに失っていることが痛かった。この日本語だけで、自分が台湾人であることを納得させられるだろうか。(下 34)

憲兵隊のなかの軍属の台湾人は、多くの場合、閩南語＝台湾語で通訳をおこなっていたのだろう。ただこの時期、中国大陆の戦線で日本軍に従軍していた台湾人通訳者には、速成で現地の言語を学習して通訳業務にあたっていた者も少なくなかったようである。「昭南島」に入った台湾人通訳者も、能力の高低にかかわらず、多種の漢語系言語と日本語のあいだの通訳にあたっていたのかもしれない。

また台湾人がやってきた。うしろに五、六人の憲兵がついている。

台湾人は言った。

「義勇軍か防空部隊に入っていたひとは、名乗り出てください。引き続きしてもらおう仕事があります」

(中略)

うしろにいた男が、光前に言った。

「あんた、義勇軍だろ。出たらどうだ」

振り返って、その男の顔を見た。食堂で何度か顔を合わせたこ

とのある男だ。

「義勇軍だろう。制服姿で帰ってきたじゃないか」

台湾人がこの言葉を聞きとめた。憲兵と共に近づいてきて、光前に訊いた。

「義勇軍に入っていたのか」

光前はあわてて首を振った。

「ぼくも台湾人だ。日本の旅券を持ってる」

「出してみろ」

「なくした」

憲兵も訊いた。

「義勇軍に入っていたって？」

とがめる口調だ。優遇しようという空気は感じられない。

光前は憲兵に日本語で言った。

「ぼくは、台湾人なんだ。日本の旅券でここに来た」

台湾人が言った。

「証言してる男がいるよ。義勇軍だったそうさ」

憲兵が言った。

「こっちへこい。べつに調べる」

「ぼくは台湾人だって」

「だからどうした？」（下 38-40）

光前は別の場所で待機していた将校のところへ連れて行かれる。

「ぼくは台湾人です。日本で教育を受けました。在住華僑とはちがいます」

将校は、光前の日本語に驚いたようだったが、すぐに言った。

「名前は？」

「梁光前」

「シンガポールで何をやっていたんだ？」

「日本の商社に勤めていました。貿易の仕事です」

「戦争がはじまったとき、つかまらなかったのか？」

「うまく切り抜けたんです。あとは、身元を隠して生きてきま

した」

「義勇軍に入っていたそうだが」

光前は、直接には答えなかった。

「華僑のふりをして、逃げまわっていたんです」

「義勇軍に入っていたか、と聞いたんだ。台湾人だって、入れてくれたんだろう？ どうだ？ 日に灼けて、その髪だ。軍帽の跡が白く残ってるじゃないか。義勇軍だったんだな？」

(中略)

将校は怒鳴った。

「馬鹿野郎！ ごまかせると思ってるのか。そんな嘘が通用すると思ってるのか」

光前は必死の想いで言った。

「ぼくは、日本人の商社で働いていました。台湾生まれで、東京で勉強したんです。ほんとうです」

将校は取り合わなかった。そばの憲兵隊員たちにうなずき、あごをしゃくった。(下 41-42)

もちろん、この「検証」が「抗日団体の協力者や共産党員を摘発し、抗日華僑義勇軍の兵士だったものをあぶりだすこと」(下 37)などを目的としている以上、光前が「帝国臣民」であること、日本の旅券を持っていること(ただし手元にはない)、日本語が流暢であること、東京で勉強したこと、日本の貿易会社に勤めていたことが義勇軍に参加していた事実を無意味なものにできるはずはない。しかし、光前はこうした「日本的要素」とでも言うべきものを盾にして、参加の事実を無効化しようとする。

光前の日本語は、表面上は不自然さを何ら感じさせないレベルであろうし、台湾人が帝国臣民であることを知らない兵士もいまい。しかし台湾人であることは、同じ帝国臣民としての同胞意識を喚起することはなく、将校の前では逆に義勇軍参加の可能性を高めてし

まっている<sup>6</sup>。「ぼくは、日本人の商社で働いていました。台湾生まれで、東京で勉強したんです」という必死の訴えもまったく功を奏さない。周囲にいる台湾人から手がさしのべられることもない。

結局、光前はこの場に現れた幹夫の要請で解放される。幹夫は知己を得ている軍上層の名前を出し、警備司令部発行の通行証を携帯している。義勇軍参加の件は突如不問に付され、それどころか、ちょうど別の場所へ連れて行かれようとしていた鄭傳順までもが、光前の求めに応じた幹夫の口添えにより、その場で解放される。日本人のちょっとした介入が帝国臣民としてのアピールなどよりはるかに効果的であることを、光前はいやでも実感せざるをえなかった。

## 7. おわりに―「きみはけっきょく、何者なんだ？」

東条英機暗殺のくわだては、土壇場で未遂に終わる。実行者の一人になるはずだった光前がえがいた筋書きが狂い、摩耶の手元で爆弾が爆発しそうになるが、光前がそれを阻止する。しかし意図せざる結果として、光前の行為は暗殺計画そのものをつぶすことになった。日本軍政下ではともかく、敗戦後に「東条英機暗殺を妨害した台湾人」「東条暗殺の烈士を殺した憲兵隊の手先」に「懲罰」(下 264)がくわえられることは避けられなかった。1945 年 8 月 18 日、すでに主が去った桜井の屋敷で、光前は自分がかかわった計画を主導していた傳順がやってくるのを静かに待っていた。予想どおり、傳順らが姿を見せる。

「傳順、待っていた」

「待っていた？」

「くると思っていたんだ」

「じゃあ用件にも見当はついているんだな」

「ああ」

---

<sup>6</sup> 後述のとおり、この後、幹夫が光前を助けることになる。幹夫は憲兵隊が「台湾人もほかの中国人も一緒くたに扱」(下 46)うのではないかと予想し、「検証」の場に足を運んだ。

「用件を知りながら、なぜ待つんだ？日本人たちは、避難したんだろう」

「日本人たちはな」

「きみはなぜ、ここに残った？」

「ぼくはどこにも行きようがない」(下 266)

光前は結局、日本人にはならなかった。日本人は迫害を恐れて避難しているが、いずれは日本へもどることになる。シンガポール占領直後、軍政要員としてシンガポールに着任した若手内務官僚で、その後、摩耶と結婚した新条勲なども、摩耶に求婚する際には「自分はいつかオーストラリア総督になる」(下 222)と豪語していたが、いまでは「わたしは内地に帰って、官僚としての最高位を狙うことにしますよ」(下 263)と、すでにあらたな「巡礼」の道を見いだしている。しかし、残された光前に帰る場所はない。そしていま、傳順らによって「人民裁判」の場に引っ張り出されようとしている。

しかしそこに、麗娜が乱入する。二人の男を撃ち、さらに傳順に銃を向けながら、光前を連れ出そうとする。

「さ、何をぐずぐずしてるの？行くのよ」

光前は、混乱のまま訊いた。

「どこにだ？」

「どこだっていいじゃない。とにかく、この島以外のどこかよ」麗娜はぐいと顔を近づけ、拳銃を光前のあごに突きつけて、厳しい調子で言った。

「光前。あんた、もう誰にも義理はないわ。義理はぜんぶ果たしているはず。あんたはどっちにも、自分ができる以上のことをやってあげたわ。だから一緒にきて。ぐずぐずしてないで。一度、あたしに誓ったことを忘れないで。帰ってくるって。」(下 270)

光前はシンガポール華人社会で、「東条を救って日本人から英雄扱いされた中国人」(下 264)と見られている。ここには「日本人」と「中国人」しかいない。光前と、その光前を捕えにきた傳順らに銃



airiti  
を向けた麗娜は、「この島の全部の中国人を敵にまわしてしまった」  
(下 270)のである。だとすれば、「中国人」としてとどまり続ける義  
理も、もはやない。

となれば、少なくとも現時点においては「〇〇人」であるかいな  
かをめぐってあれこれ悩む必要も、あらたなアイデンティティを性  
急に求める必要もない。程度の差こそあれ、もともと二人がそうし  
た近代民族イデオロギーを強烈に渴望していたわけではないだろう  
が、かれらは戦勝/戦敗を受けての熱狂、混乱から逃れる決断をする。  
ただそれは、ややためらいがちな光前を麗娜が引っ張る形になって  
いる。帝都での勉強、日本人貿易商のもとでの勤務、抗日義勇軍へ  
の参加、東条暗殺計画への関与など、たえず「〇〇人」であること、  
「〇〇人」であるという周囲の視線を意識してふるまわざるをえな  
かった光前にとって、「何者」でもない、あるいは「何者」でもある  
自分になるまでには、まだ紆余曲折が避けられないのかもしれない。

「さ、早く」

麗娜は光前の背に手をまわしてきた。

光前は、麗娜に押されるようにテラスへと向かった。

テラスを出ようとしたとき、傳順がうしろから声をかけてき  
た。

「光前。きみはけっきょく、何者なんだ？」

光前は立ち止まり、振り返った。

「ぼくは」

雷鳴が激しく鳴り響いた。思わず首をすくめるほどの音量だ  
った。

麗娜が、ぐいと手を引っ張った。光前は、答えることをあき  
らめた。いや、そもそも、いまの自分に答えの用意があったら  
うか。

(中略)

庭の芝生を駆け抜け、蘭の花壇の脇を抜けるとき、うしろか  
ら呼び声を聞いたような気がした。傳順がいま一度呼びかけた

のか。それとも、呼ばれたような気がしただけか。

いずれにせよ、いま自分には、先に応えなければならぬ声がある。(下 271)



□2014 年 12 月 31 日受理